Ⅱ　本　編

はじめに

～　本社会実験のテーマ　～

体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立

富山市は、平成 17 年４月に周辺の４町２村（大沢野町、大山町、婦中町、八尾町、細入村、山田村）と合併したために、県庁所在地では全国第２位の面積を誇る自治体となっている。エリア的には、“海（富山湾)”から“山（立山山麓)”までバラエティに富んでおり、40 万人以上の人口を抱える中核市でもあることから、農山漁村と都市が市内にバランスよく存在するという特徴がある。

そのため、富山市では、一市単独で都市と農山漁村が交流できる可能性がある。また、都市側、農村側の双方で、交流に向けて潜在力のある組織や施設等を多く抱えているという土壌もある。

例えば、海側の大広田地区には、環境共生公園や地域資源観光マップづくり、廃食油リサイクル、学校田の取組などを推進している「大広田環境づくり協議会」がある。一方、山側の八尾地区には、農産物の直売や特産品の開発、味噌や豆腐づくり等の体験交流を進めている「黒瀬谷交流センター運営委員会」、田植えや稲刈り等の農作業実習、おわら風の盆の前夜祭の見学等を呼び掛けている「みのり棚田の学校実行委員会」、「遊び」と「農的体験」を融合させた新しい子育ての形態を模索提案している「富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊」などの多様な団体がある。併せて、富山市内には住民参加型のイベントやボランティア活動を展開している「富山社会人大楽塾」のようなコーディネート機関もある。

また、富山市では、廃食油リサイクルや間伐などの地域課題の解決に向けて地域通貨を活用してボランティア活動等を支援していく「エコ・ボランティアサポート事業」を実施しているほか、「越中八尾スロータウン特区」の活動として、旧八尾町がグリーンツーリズムに注力していたことなど、都市と農村の交流の萌芽が随所に見られる。

上記のような地域内のポテンシャルと、「神通川」を通して上流と下流の関係にある地形的なつながりの双方を考慮に入れて、本社会実験では「大広田地区」と「八尾地区」をモデルエリアに設定し、両地区が双方向かつ長期安定的な交流を推進するための契機とすることを目指す。

将来的には、「八尾地区」に「大広田地区」の『出会い・交流の場』を設けて、その相互利用を図ることも視野に入れて、神通川流域の豊かな自然や地域資源等を活かした特色ある流域づくりを目指す。ひいては、今後、富山市内の特定の地区どうしが交流を図る際のモデルを確立することをも目指す。

なお、富山市では今後、市民参画型の取組を広げていく意向が強いことから、本社会実験でも、市民参画を一つの理念として掲げ、取組を進めていく。

したがって、遂行体制についても、行政の統括の下に、既存の市民組織などを十分に活用するよう留意する。

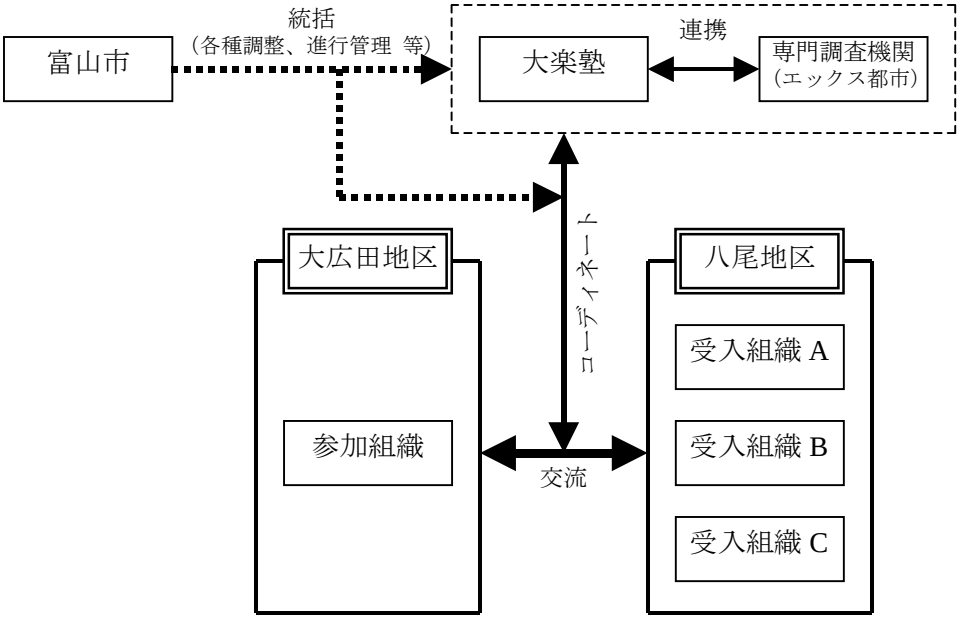
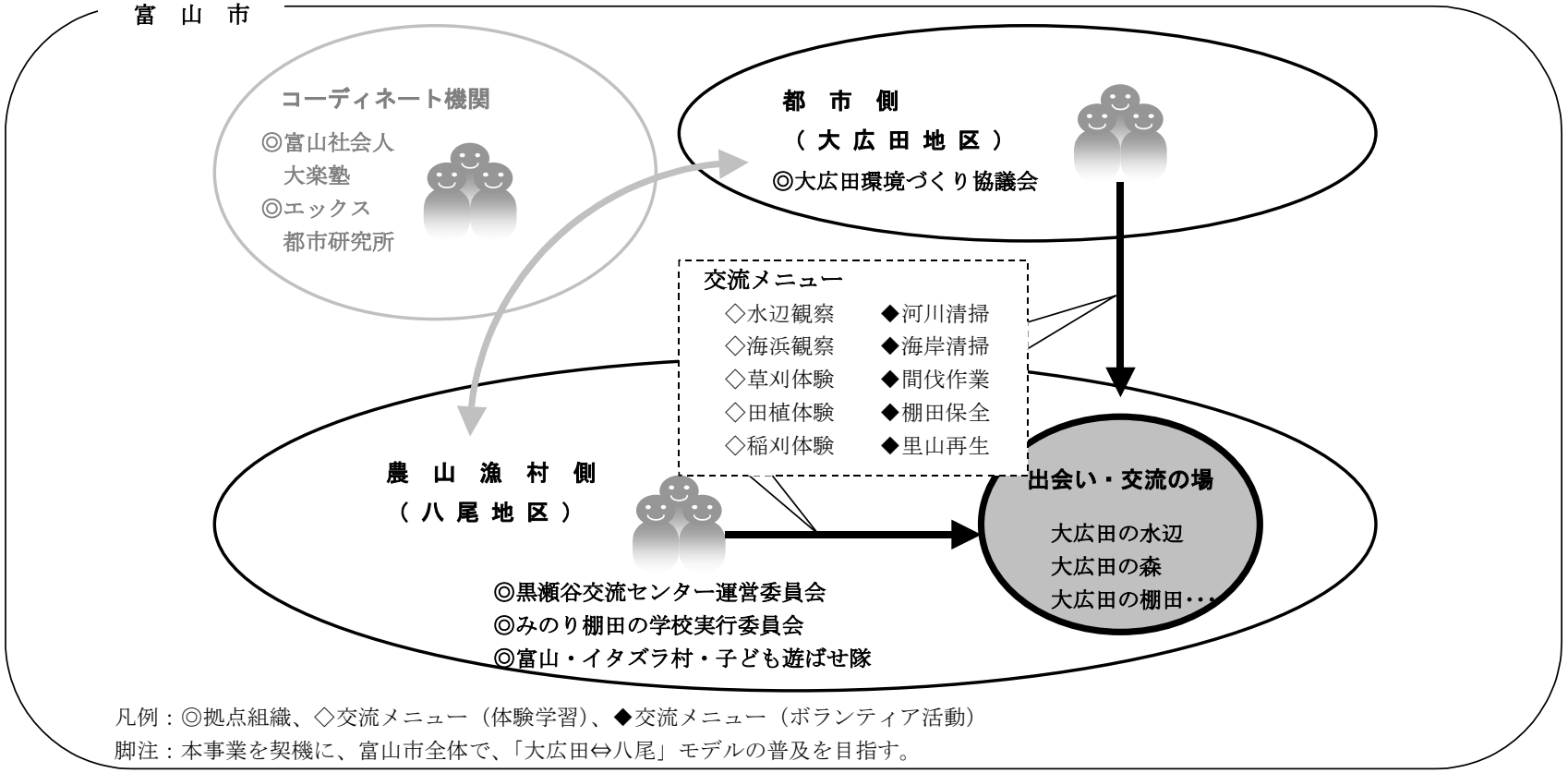


図１　本社会実験の遂行体制

目　標：市内で、都市側と農村側の特定の地区どうしが、自然豊かな一定の地域を『出会い・交流の場』として相互利用することにより、「都市」と「農村」の長期安定的な交流を促進する。

方　針：都市側は「大広田地区」を、農村側は「八尾地区」を、それぞれモデル地区として設定する。
対象領域は、「体験学習」と「ボランティア活動」に限定する。
相互利用メニューの褒賞として、地域通貨の利用を（交流時の実際の利用に向けた課題整理まで含めて）検討する。



凡例：◎拠点組織、◇交流メニュー（体験学習）、◆交流メニュー（ボランティア活動）
脚注：本事業を契機に、富山市全体で、「大広田⇔八尾」モデルの普及を目指す。

図２　本社会実験の全体像

第１章　実施地区の概要

１．実施主体の概要

（１）農村側（八尾地区）の実施主体

ア　黒瀬谷交流センター運営委員会（旧八尾町黒瀬谷地区）

（ア）設立の経緯や目的

黒瀬谷地区では、米価の低迷等による農家所得の減少や生産意欲及び地域活力の低下が大きな問題として認識されており、その解決に向けた一助として都市農村交流の推進を通じて、地域振興を図るための検討が進められていた。

平成 11 年３月には、そのための拠点施設として、「黒瀬谷交流センター喜楽里館」が建設された。それを受けて平成 11 年４月には、「喜楽里館」を活用した実践的な活動を展開するため、「黒瀬谷交流センター運営委員会」が設立された。

その主な目的は、農産物の直売などを通じて生産者どうしの交流及び生産者と消費者との交流を図りながら、地域を活性化していくことである。

（イ）活動エリアの特徴

黒瀬谷地区は旧八尾町の東北部に位置し、標高は 80ｍから 200ｍ。岐阜県から流れる久婦須川沿いに集落が点在する中山間地域である。

久婦須川の下流域に当たる集落は、市街地と隣接していることから、住宅団地などが整備され、人口が増加傾向を示している。一方、上流域に当たる集落は積雪等の厳しい気象条件や、道路整備等の生活環境に係る基盤整備の遅れを反映して、若年層が町外へ流出しがちであり、過疎化・高齢化が進行している。

（ウ）主な取組内容

「黒瀬谷交流センター運営委員会」の下部の組織として「農産物直売部会」、「特産品開発部会」、「体験交流部会」の３部会を設け、部会間の連携を図りつつそれぞれの分野で多様な取組を継続的に展開し、地域の活性化に貢献している。

「農産物直売部会」では、月に１回「菜菜こられ市」という直売会を開催している。地元の個人が自家菜園で栽培した農産物を持ち込めば、部会スタッフが袋詰めやラベル貼りを代行してもらえる。市場価格を参考に決定された価格で販売され、各個人は売上の１割を販売手数料として部会に支払う仕組みとなっている。また、当日の売れ行きの状況を見ながら、地元スーパー内のインショップへ農産物を移動させるといった手段も併用して、なるべく売れ残りを出さないよう工夫している。インショップにおける価格設定、包装、運搬などは全て個人管理であり、売れ残りの商品は全て回収される仕組みとなっている。

「特産品開発部会」では、地元農産物を活用した特産品の開発・商品化に取り組んでおり、その成果として「金時おこわ」などは既に販売されている。

「体験交流部会」では、地元産の農産物を材料に使用して「そば打ち」、「豆腐づくり」、「パンづくり」などを行い、積極的な交流を進めている。

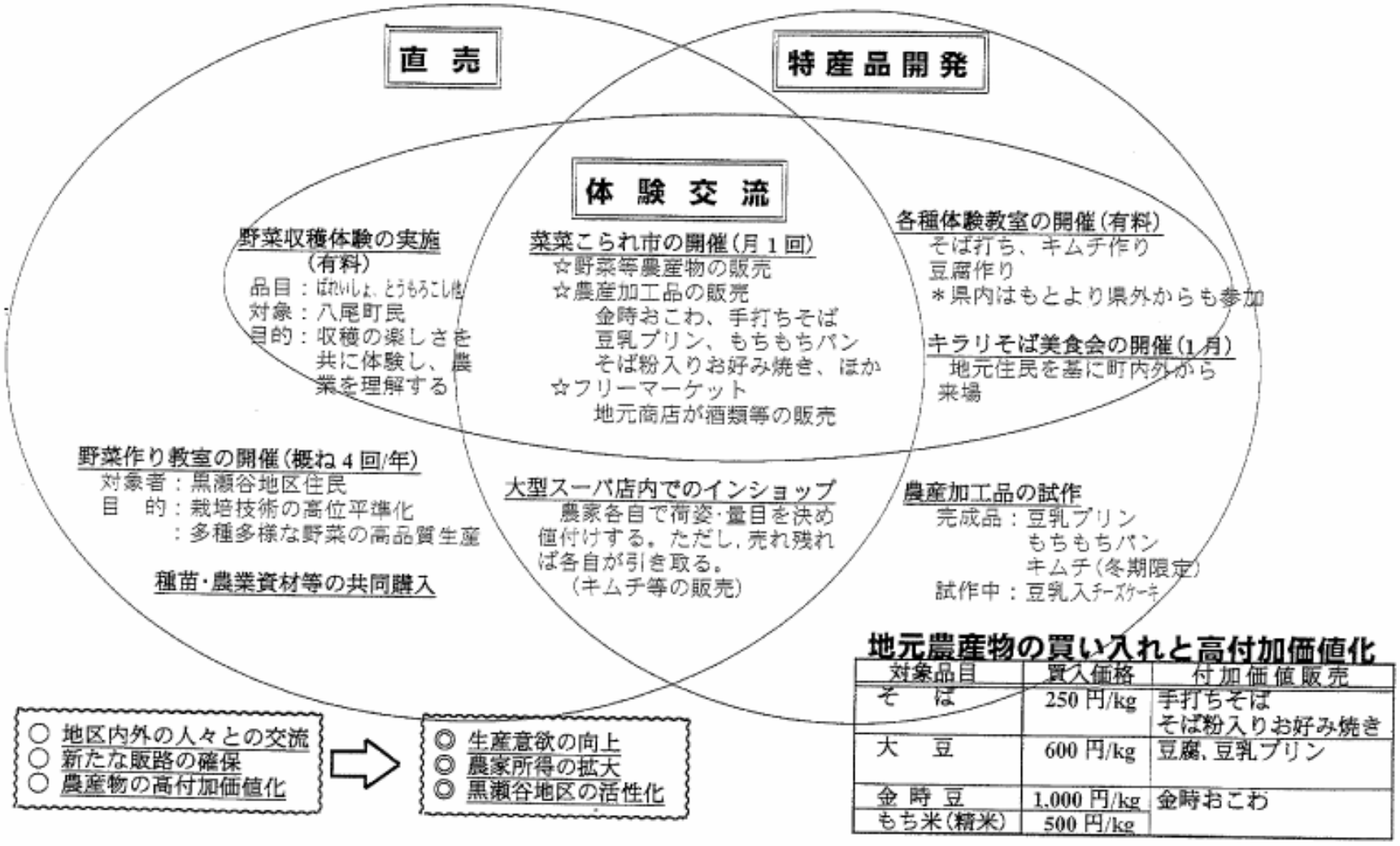


図３　黒瀬谷交流センター運営委員会の主な取組

イ　みのり棚田の学校実行委員会（旧八尾町野積地区）

（ア）設立の経緯や目的

平成 11 年に野積地区付近の棚田が「全国棚田百選」に選定されたことを契機として、「みのり棚田の学校」が開校されることになり、その事務局機能を受け持つ組織として、「みのり棚田の学校実行委員会」が設立された。なお、「委員会」は営農組合を母体に立ち上げた組織である。

「みのり棚田の学校」の受講者に対しては、野積地区の里山や棚田等の自然の美しさや豊かさをＰＲしている一方で、地元住民にとっては、そのような行為が自らの地区のすばらしさを見直す機会となる面がある。こうした関係性を踏まえ、受講者と地元住民の双方の交流を深化させていくことが、「委員会」設立の主な目的である。

（イ）活動エリアの特徴

平成８年より野積地区では下乗嶺、乗嶺、高嶺、新名の４集落が営農組合を結成して農業に従事する状況が続いていた。

地域内の農地１区画当たりの平均面積は 15 アール程度であり、決して広い区画ではないが、圃場整備が完了しているため、田植えや稲刈りの際には最新の大型機械を効率的に導入できるなど条件面で優れた要素もある。そのため、ほとんどの組合員が、夫婦二人を労働力とする兼業農家であり、現状では、週末・休日営農となっている。

そのように営農面ではある程度順調に推移しているものの、離農・少子化などの影響を受けて、今後は担い手が不足する恐れがあり、その対策を早急に講じていくことが、重要な課題となっている。

（ウ）主な取組内容

毎年５月に開校する「みのり棚田の学校」は年間を通じてコンスタントに都市と農村の住民が交流を深め合う学校である。

主な活動としては、春の田植えや野菜等の植付け、夏の蛍観賞会や“おわら風の盆”の見学、秋の稲刈りや野菜等の収穫などである。花木や草花などを用いた遊びの伝承のようなユニークな取組も、併せて実施している。

また、交流を継続的に維持展開していくための媒体として、年５回のペースで「棚田の学校便り」という自作の新聞を発行し、都市と農村の紐帯を強化するよう努めている。

ウ　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊（旧八尾町布谷地区）

（ア）設立の経緯や目的

昭和 58 年に旧八尾町布谷地区の山里に位置する廃屋を改造して開設された「子どもイタズラ村（遊酔亭)」が発祥の起源である。遊酔亭では、二十数年間にわたり 300 名以上の子どもに遊び場を提供してきた。

そこでは、無心にひたすら遊ぶ子どもの姿に、必死に生きようとする潜在力を見出すことができ、子ども時代に豊かな遊びを経験しておくことが、後々の人生に大きな力を与えていく様を垣間見ることができた。

そのため、閉塞した現代を救う一つの方法論として「遊び力」＝「子ども力」というテーゼを打ち立て、「ゆったりと流れる時間」、「信頼できる気遣い不要な仲間」、「大人の強制の及ばない自由な空間」という３つの“間”を揃え、子どもが豊かに遊べる“場（権利)”を保障していくことが重要と考え、平成 16 年にＮＰＯ法人「富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊」が設立された。

その主な狙いは、“呼吸する生物としての人間”という生存の原点に立ち戻り、「農的生活」を子どもに提示していくことにある。生きること、暮らすこと、働くことの三者が一体不可分となった「農的生活」の場の創設のため、布谷地区の森や川や里山と調和した「子どもイタズラ村」を立ち上げて、「遊び」と「農的体験」を融合させた新しい子育ての形を実現していくことを目指している。

（イ）活動エリアの特徴

最大の特徴は「野積川」が流れていることである。そのため、清流での様々な川遊び（川流れ、川登り、飛び込みなど）を実施できる点が遊び場の観点から非常に恵まれているものと考えられる。

（ウ）主な取組内容

「遊び力」、「子ども力」を高めることを目的として、川遊び、皿回し、コマ回し、釘ナイフづくり、落書きなど「遊び」に一点集中した多様な活動を展開している。夏季の川遊びはもちろん、冬季には積もった雪でカマクラをつくるなど、遊びの中に季節感が備わっている点も特徴的である。

また、森林組合と連携した草刈りなども行っている。そこでは、機械ではなく敢えて大きな鎌を用いて手作業で草を刈ることにより、「農的体験」を強く印象づけるような工夫も施している。

（2）都市側（大広田地区）の実施主体

ア　大広田環境づくり協議会（旧富山市大広田地区）

（ア）設立の経緯や目的

大広田地区には隣接して「エコタウン産業団地」が位置しており、日頃より資源循環やエネルギー有効利用等との接点が多く、住民の環境意識が非常に高いという地域特性が見られる。

このような地域的な属性に加え、当該地区は元々小学校区を基本単位とした住民活動も盛んな地域であり、校区の児童クラブやエコタウン入居企業などの幅広い多様な主体とのネットワークの構築が一つの課題であった。

そのため、“環境”をキーワードとして地区を一つにまとめるための拠点組織として、緩やかな連帯の下に「大広田環境づくり協議会」が形成され、その事務局が大広田地区センターに置かれることとなった。

「協議会」では、大広田校下住民・団体・事業者・行政が協力してエコタウン事業の振興と環境共生を図り、「環境にやさしいふるさとづくり」に向けた積極的な実践活動を推進していくことが、主な目的として掲げられている。

（イ）活動エリアの特徴

最大の特徴は近隣に市の「エコタウン産業団地」を抱えていることである。

「エコタウン」には資源循環の拠点施設として、生ごみ及び剪定枝のリサイクル施設、廃プラスチックリサイクル施設、木質系廃棄物リサイクル施設、自動車リサイクル施設などの循環系の施設が集約されており、エネルギー利用も含めて、ゼロ・エミッションが具現化されている。

また、ソフト的な施策の要素も併せ持ち、富山市エコタウン交流推進センターが開設されており、地区住民の寄り合いなどの場として、活発に利用されている。

（ウ）主な取組内容

「環境にやさしいふるさとづくり」という理念を掲げ、それにつながる具体的な行動及び校下住民大会や連絡協議会の開催を通じた情報交換など、多様な活動が展開されている。

具体的には、地区センターや公民館を拠点として、アルミ缶や廃食油のリサイクルを随時実施しているほか、エコタウン学園の講師の派遣、花の道づくりや海岸清掃などの美化活動、児童クラブと連携した学校田の整備等の環境学習など、年間を通じて幅広い取組を継続的に実施している。

２．実施地区における問題点と関係者の意識

（１）交流実施に向けた現状の問題点

都市と農村の交流を実施するに当たり、現時点で既に把握されている問題点等がある場合には、それらの内容を予め整理しておく必要がある。

富山市の場合、主に下記のような事項が、問題として指摘されている。

◆都市側の参加者が少なく、農村側の支援協力者も少ない。
◆市域がコンパクトであり、道路などの交通事情も良いため、民家宿泊等に非日常的な感覚を抱き難い。現状では、日帰りの取組がほとんどである。
◆兼業農家率が高く、都市側の市民でも農業体験できる機会が豊富にある。一方、農村側でも農業外収入がそれなりに見込めることから、敢えて都市側と交流するメリットを感じ難い面がある。

（２）事前に把握された実施地区の意識

上記の現状における問題点を踏まえ、本社会実験に先立ち、農村側及び都市側の実施地区ごとに、抱えている当事者意識やニーズ及びシーズを調べたところ、下記のような認識が示された。

ア　農村側（八尾地区）の意識

◇交流メニューの優先順位をつけるとすれば、*『水辺』*→*『森』*→*『棚田』*という感覚を抱く。*『森』*や*『棚田』*の維持管理は手間が掛かる。*『棚田』*は地区内にて計画している学校田の取組と重複してしまう。
◇*『水辺』*であれば比較的社会実験を始めやすい。地形的に見ても山側の八尾地区と海側の大広田地区は、「神通川」を通してつながっている。また、川上で使用する農薬による川下の汚染、川上からの漂着ごみによる「富山湾」の汚染などの環境問題について、山側と海側の双方の住民が参画して、「神通川」でつなげて考えてみることは非常に有意義である。
◇「神通川」上流の河川清掃に大広田地区の住民が参加するだけではなく、「富山湾」の海岸清掃に八尾地区の住民も参加するなど、双方向の関係を築けるとよい。
◇河川清掃や海岸清掃を契機に、レクリエーション等の要素も取り入れた滞在型のプログラムを整備できれば、子どもの環境教育及び高齢者の余暇活動や生きがい創出の面での効果も期待できる。したがって、市内の取組とは言え、宿泊という要素まで発展できるとよい。
◇大広田地区の『出会い・交流の場』が八尾地区にできれば、毎年継続的・定期的に行事ができるというメリットが生まれる。本社会実験を契機として、河川清掃や海岸清掃といった手のつけやすいところから交流を図り、長期安定的な関係を築いていくことが重要である。

イ　都市側（大広田地区）の意識

◇大広田地区でのニーズが高い*『水辺』*について、河川清掃という形で受け入れることができれば水辺環境が改善されるメリットが生まれる。

◇農村側の取組としては、地元農産物の直販が既になされており、そのマーケットを拡大できれば、農業振興面で副次的な効果が期待できる。そのためには、農村側と都市側が地元食材を一緒に調理して食事をともにする交流の機会を設けるなど、滞在型プログラムの要素を盛り込むことが重要である。その際、宿泊施設の整備が問題となることも想定されるが、公共施設等を一時的に活用することも含め、既存インフラと結びつけた滞在型の交流にすることができれば、長期安定的な関係を築けると思う。

◇八尾地区で現在実施している交流メニューは「味噌や豆腐づくり等の体験交流」、「田植や稲刈等の農作業実習」、「おわら風の盆の前夜祭の見学」等、*『里』*での取組が中心であり、*『水辺』*に関する経験やノウハウの蓄積が一層必要な状況にあると思う。

第２章　社会実験の概要

１．本社会実験のコンセプト

前述した通り、本社会実験のテーマは“体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立”である。

したがって、将来的な方向性も含め本社会実験では、**「神通川」という水系・流域を通じ、都市側（下流側・海側）と農村側（上流側・山側）が相互利用できる『出会い・交流の場』を農村に設けて、その土地を協働管理していく**というコンセプトを目指し、各種取組を実施していくこととした。このような方針で対応することで、都市と農村の関係性を一過性ではない長期安定的なレベルにまで強化できるものと考えられる。

その結果、お互いが一定の時間を共有することになり、都市側で生活している市民の自然志向や環境意識が高まるという効果が期待できる。一方、農村側から見ても、地域内の自然環境（森林、河川、里山 等）に定期的に手が入り、祭礼などの文化活動でも連携できる要素があるため、コミュニティ及び社会的共通資本の健全な維持という効果が期待できる。

さしあたり、『出会い・交流の場』を相互利用する際の交流メニューとしては、

◎大広田の水辺：小中学生が魚や水草を観察したり、シニア世代が河川を清掃したりする特定の『水辺』
◎大広田の森　：小中学生が草刈を体験したり、シニア世代が間伐作業を実施したりする特定の『森』
◎大広田の棚田：小中学生が田植や稲刈を体験したり、シニア世代が棚田保全や里山再生に関わる作業を実施したりする特定の『棚田』

などが挙げられるが、まずは、直接的なメリットが見えやすい海岸清掃などの*『水辺』*での取組を契機に、滞在型の『森』や『棚田』などの取組まで拡大発展させていくことを目指す（これらのメニューに対する当事者の意識については前章を参照）。社会実験実施前の事前ヒアリングでは、農村側の交流主体（受入組織）の協力度合が取組の成否を左右する面が大きく、「どの分野で協力すればよいか」、「どこまで協力すればよいか」という点についての線引きが非常に重要であるとの意見が多数を占めた。

したがって、交流メニューの抽出確定にあたっては、農村側の負担が過重にならないよう配慮して、原則的に現在実施中の取組を最大限活用していくという姿勢に基づき、具体的な検討を進めた（＝**できることから、できる範囲で、実施していく**）。

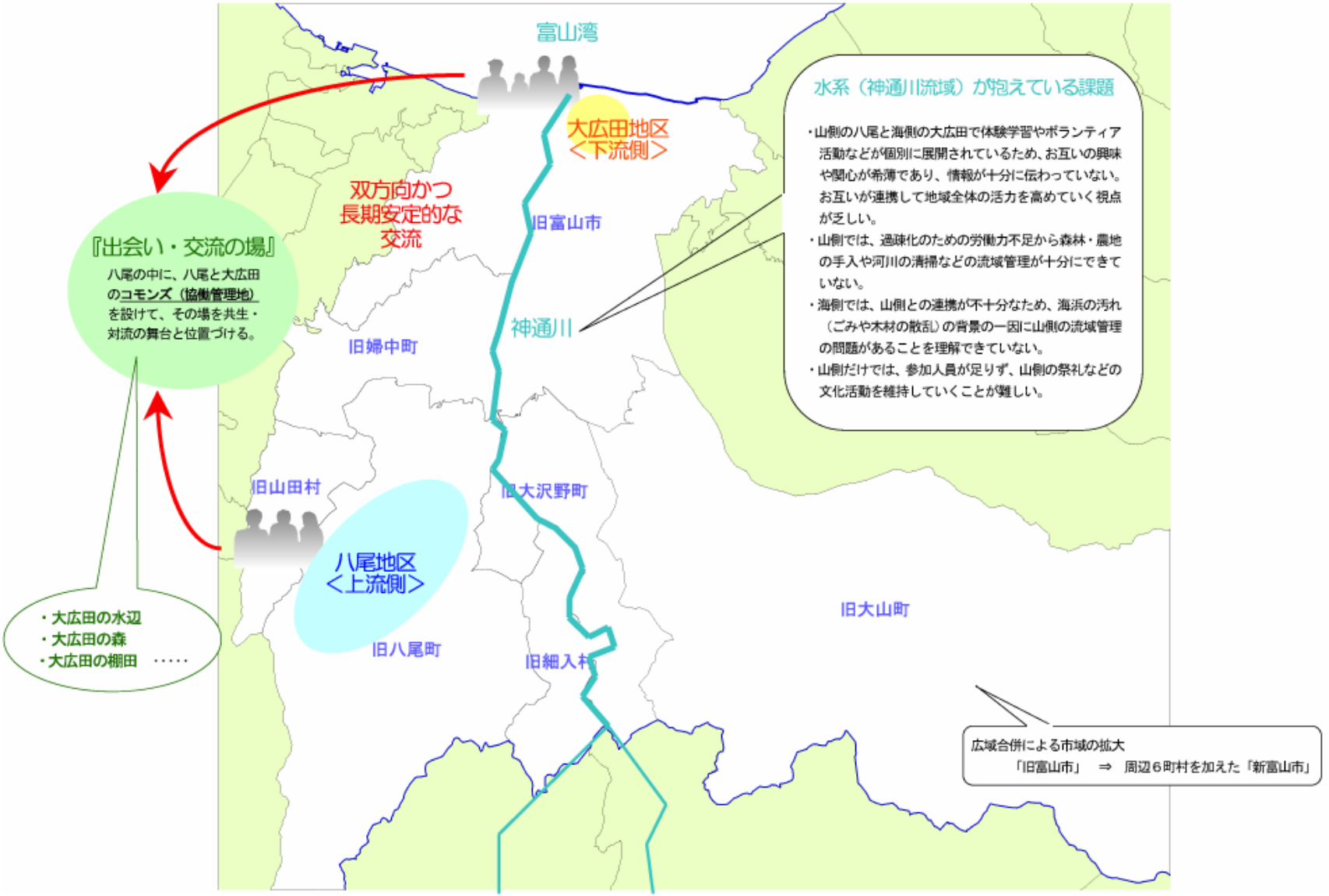


図４　本社会実験のコンセプト

２．本社会実験の検討フロー

本社会実験の遂行に向けては、特に農村側の現状や負担に配慮して、受入組織の選定、交流メニューの絞り込み、具体的な検討手順など、必要な作業課題については、地域のポテンシャルを活用しながら、可能な限り効率的に進めることとした。

（１）受入組織の選定

八尾地区は幾多の谷筋からなる地域であり、それらの谷筋ごとに、多様な組織が存在していることがこの集落の大きな特徴である。それぞれの組織が多様な活動を展開しているが、当然、組織ごとに得意な分野もあれば、全く手をつけていない分野もある。

したがって、受入組織の特性を考慮した上で、事前にその協力度合、期待される効果、実施可能な交流メニューの種類などを勘案しつつ、その都度、相応しい受入組織を選定しながら、本社会実験を実施していくこととした。

（２）交流メニューの絞り込み

１年間という社会実験の期間や八尾地区の受入組織の負担を考慮すると、本社会実験で全ての分野にわたり、広範な取組を実施しようとするよりも、ある程度対象を明確に設定した方が望ましく、かつ、その方が現実的であると考えられる。

したがって、選定した受入組織の現状や得意分野などを踏まえ、事前に関係者と協議して意見交換及び各種調整を図り、事前に交流メニューを絞り込んだ上で、本社会実験を実施していくこととした。

（３）具体的な検討手順

具体的な検討手順としては、

○交流メニューの洗い出し　　（　←　いつどこでなにをやるか）
○交流プログラムの作り込み　（　←　どのようにやるか）

の順で内容を詰めていくことが求められる。

その際、都市側のニーズと農山漁村側のシーズが存在しても、そのメニューが“痒い所まで手が届く”プログラムにまで熟成していなければ、本社会実験を実施できない点に留意しておく必要がある。

したがって、八尾地区と大広田地区の双方が同じテーブルについて各種議論しながら、下記のような項目について、プログラムの詳細を詰めていく作業が必須となることから、そのような対応を図るよう配慮した。

・*責任者や担当者の選定*
・*取組の規模（対象期間、対象エリア、参加人数、予算 等）*
・*取組の時期や場所*
・*取組当日の手順（移動交通手段、利用設備・器具 等）*
・*参加者の募集（ＰＲ、出欠確認 等）*

併せて、取組のインセンティブを高めるための補助的な手段としての地域通貨の利用や、市広報の活用によるＰＲの推進など、補完的な役割・機能についても配慮しながら検討を進めるよう留意した。

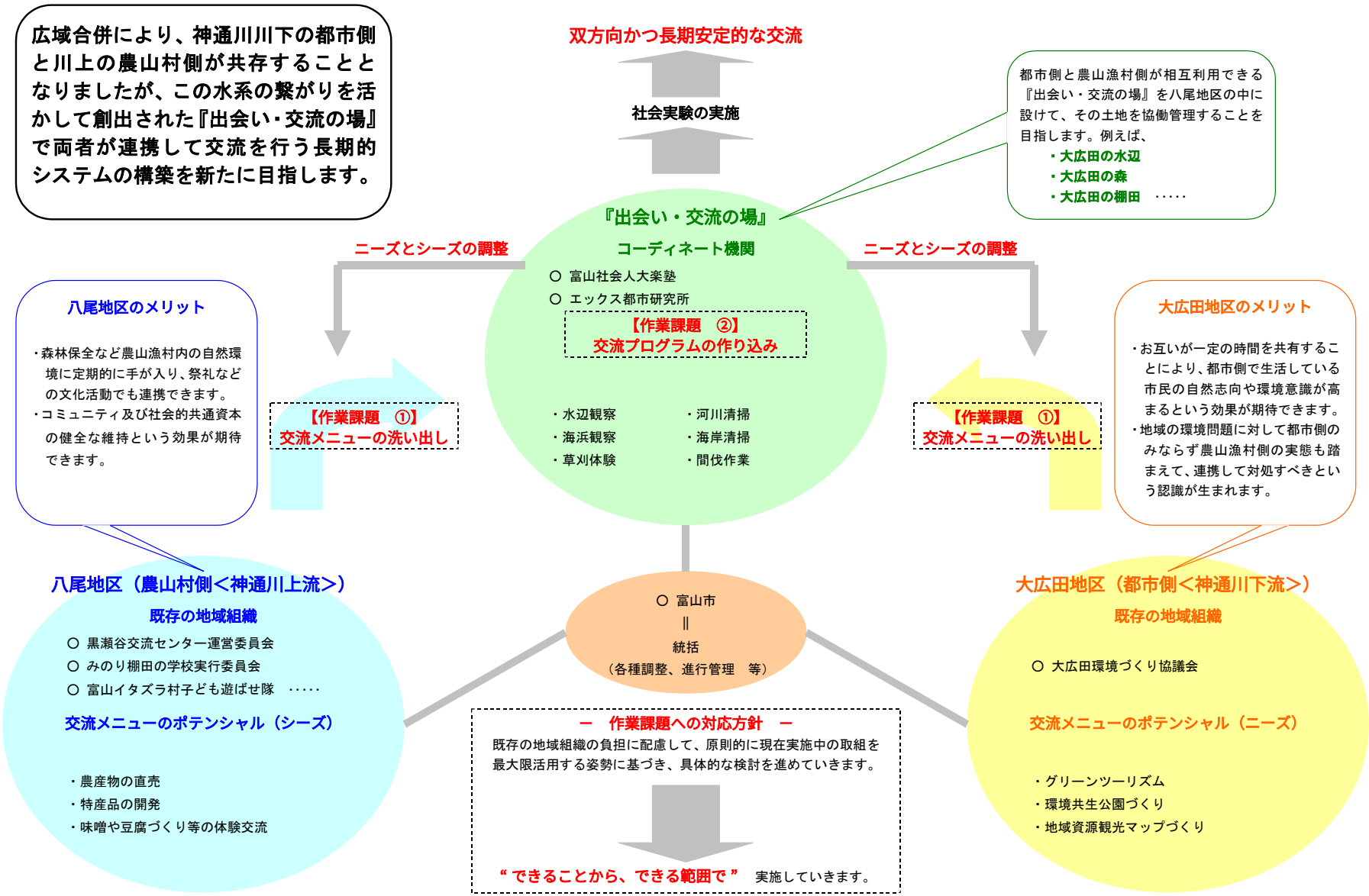


図５　本社会実験の検討フロー

３．検討フローに基づく交流メニューの抽出

前節の検討フローにおける考え方に即した上で、メニュー抽出の際の判断要素として「場所」と「対象領域」という二つの軸を表１のように据えて、参加団体の得意分野や背景事情（＝どの時期にどのくらいの要員をあてがえるか など）も含めて、具体的なメニューをマッピングした。その結果を図６に示す。

表１　交流メニュー抽出の際の判断要素

軸	考え方
場所	・山側の八尾地区で交流する。 ・海側の大広田地区で交流する。
対象領域	・体験学習： 楽しみ度合を重視したイベント的な取組 ・ボランティア活動： 地域環境への役立ち度合を重視した実利的な取組

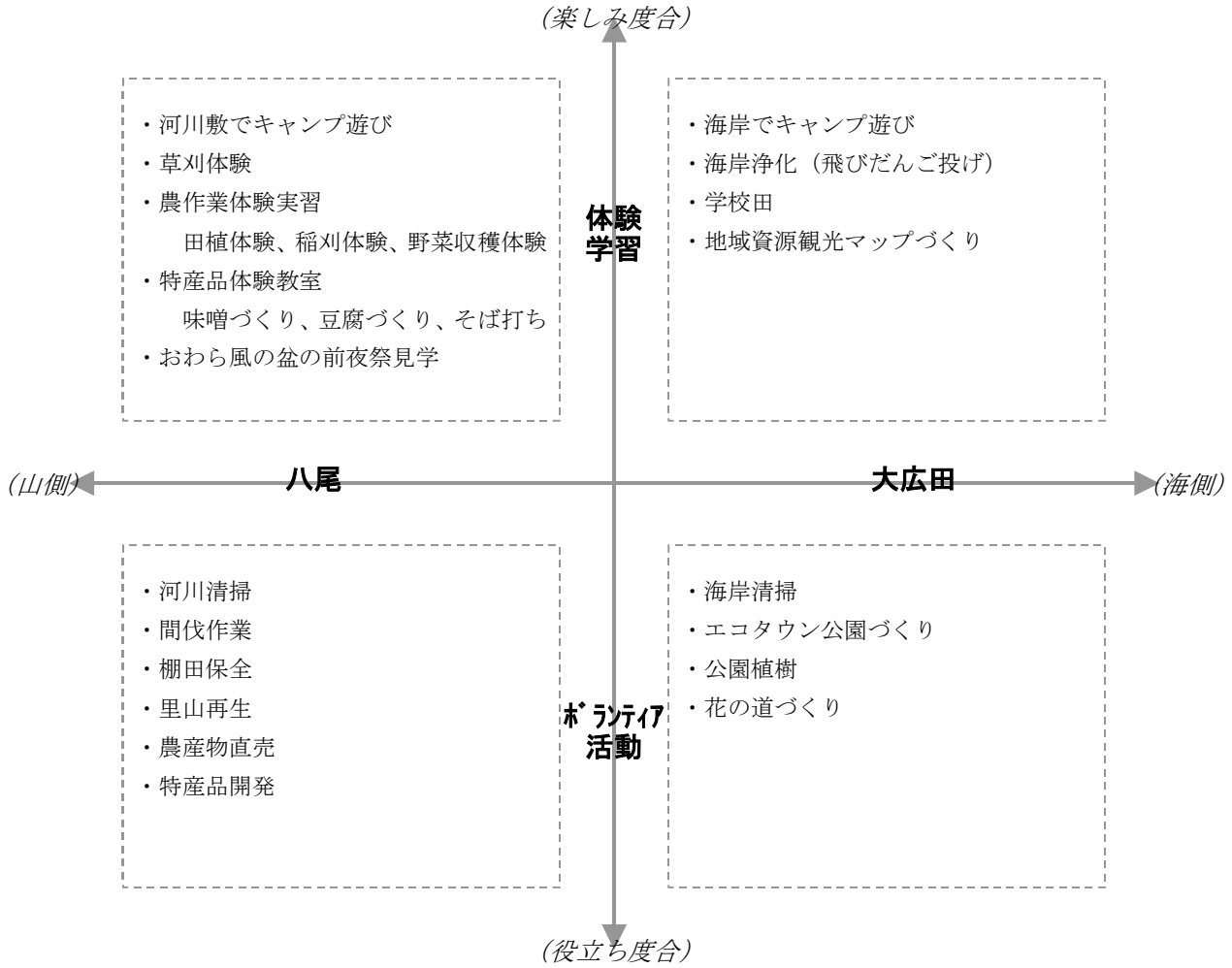


図６　交流メニュー抽出のためのマッピング

“楽しみ”の要素と“役立ち”の要素のバランス、イベント開催に向けた準備作業の量や当日の参加可能人数など､諸々の条件について意見交換･各種調整を図ったところ、下記６つの交流メニューが候補として挙げられた（括弧内は主催団体である)。

① 親子遊び教室	(富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊)
② 森の草刈り少年隊	(富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊)
③ エコタウンの見学等	(大広田環境づくり協議会)
④ キラリそば美食会	(黒瀬谷交流センター運営委員会)
⑤ 農産物・特産品の直売会	(黒瀬谷交流センター運営委員会)
⑥ 蛍の観賞会	(みのり棚田の学校実行委員会)

※⑤～⑥の取組は参加者を募ったものの応募が少なく、今回の社会実験の枠組みの中では実施されなかった（ただし、両者とも地区内における定期的な活動であるため、地区内では通常通り実施された)。

第３章　交流イベントの内容

１．交流イベントのスケジュール

交流イベントのスケジュールを表２に示す。

当然のことながら、交流イベントを実施するためには、関係者間の意思疎通を十分に図り、事前の準備を入念に行うことが必須になる。したがって、本調査研究では、取組と取組の合間に適時ミーティングを入れて、適切な進行管理を行いながら、各種調整を円滑に進めるよう心掛けた。併せて、電話、ＦＡＸ、電子メール等の通信手段を用いて、ミーティングを補完するように努めた。

次節以降では、表２の網掛部に示した各種交流イベントについて、その具体的な内容を整理した。

表２　関連スケジュール

日　時		取　組
平成 18 年	5 月 30 日	都市農山村共生対流調査ミーティング（第 1 回）
平成 18 年	7 月 13 日	北陸農政局打合せ
平成 18 年	**8 月　2 日**	**交流イベント（第 1 回）** **イタズラ村　親子遊び教室**
平成 18 年	**8 月 19 日～20 日**	**交流イベント（第 2 回）** **イタズラ村　森の草刈り少年隊**
平成 18 年	9 月 29 日	都市農山村共生対流調査ミーティング（第 2 回）
平成 18 年	10 月　3 日	農水省検討委員会（第 1 回）
平成 18 年	**10 月 15 日**	**交流イベント（第 3 回）** **大広田環境づくり協議会　エコタウンの見学等**
平成 18 年	12 月 14 日～15 日	都市農山村共生対流調査ミーティング（第 3 回） ＜八尾地区現地視察＞
平成 18 年	12 月 15 日	北陸農政局打合せ
平成 19 年	1 月 11 日	農水省検討委員会（第 2 回）
平成 19 年	**1 月 28 日**	**交流イベント（第 4 回）** **黒瀬谷交流センター運営委員会　キラリそば美食会**
平成 19 年	3 月　7 日	農水省検討委員会（第 3 回）
平成 19 年	3 月 20 日	都市農山村共生対流調査ミーティング（第 4 回）

２．交流イベントの実施記録

（1）イタズラ村　親子遊び教室

ア　日時

□平成 18 年 8 月 2 日（水）9：30～16：30

イ　場所

□NPO 法人　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊　遊酔亭　（八尾町布谷）

ウ　天候

□晴れ

エ　関係者

（ア）参加側

□大広田環境づくり協議会　（大人 5 名＋小人 9 名＝合計 14 名）

（イ）受入側

□NPO 法人　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊　（大人 5 名）

オ　交流メニュー

（ア）交流の分野

□体験学習

（イ）交流の趣旨

□自然の中での遊びを通じて、親子の関係を深め、子どもの情操を養うこと。

□海側の住民が、山側の住民の生活や取り巻く環境等を理解し、その実態を正しく認識すること。

カ　交流プログラム

（ア）交流のスケジュール

表３　当日スケジュール

時　刻	スケジュール
9：30	JR 越中八尾駅集合
10：10	遊酔亭到着、オリエンテーション ・川遊びの説明 ・釘ナイフづくりの説明 ・薪割りの実演
10：40	着替え、移動（軽トラック荷台）
10：50	野積川到着、川遊び ・水泳 ・虫捕り ・石投げ
12：20	移動（軽トラック荷台）
12：30	遊酔亭到着、昼食、部屋遊び ・薫製づくり（チーズ） ・コマ回し、皿回し
13：30	移動（数名は部屋遊びを続行）
13：40	野積川到着、川遊び（午前より下流のポイント）
15：00	移動（歩き）
15：20	遊酔亭到着、おやつ（スイカ、薫製チーズ）、部屋遊び
16：00	主催者挨拶、レポート提出の協力依頼
16：30	解散

（イ）交流の具体的な内容

□吸血性のオロロ（＝イヨシロオビアブ）のいない時期であり、天候にも恵まれたことから、川遊びをメインに据えた。

□休憩に軽トラックの荷台を用いるなど、子どもを喜ばせるための仕掛けを随所に設けた。

□子どもの疲労の状態等を見て、午後には川遊びと部屋遊びの二手に分けるなど、フレキシブルな対応を心掛けた。

□川遊びの際には、下流側には必ずスタッフが立つなど、安全面には細心の注意を払った。

遊酔亭（外観）

遊酔亭（室内）

薪割りの実演

軽トラック荷台での休憩

川遊び（午前）

コマ回し

川遊び（午後）

おやつのスイカ

キ　関係者の意見

（ア）参加側の感想・コメント

□このような企画が夏休みにあると、子どもを連れ出せるのでありがたい。

（イ）受入側の感想・コメント

□普段から関与している手慣れた取組を展開する方針で、当日のプログラムを実施したため、それほど負担を感じないで済んだ。

ク　問題点・課題

□大広田環境づくり協議会を通じて、校下の児童クラブに話を流したことが参加者の動員に貢献した面がある（協議会だけでは、なかなか人を集められない)。

□予算等に限度があることから「できることから、できる範囲で」というスタンスは必須である。

□川遊びを行う場合は、オロロがいない時期を選ぶことが望ましいが、その時期は梅雨明け後１週間ぐらいしかない。タイミングを外さずに交流を図ることが重要である。

□もう少し水着の持参を徹底した方が良かった。交流実施前の段階での情報伝達の精度に課題を残した。

（2）イタズラ村　森の草刈り少年隊

ア　日時

□平成 18 年 8 月 19 日（土）8：00～20 日（日）16：30

イ　場所

（ア）宿泊

□NPO 法人　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊　遊酔亭　（八尾町布谷）

（イ）草刈り

□婦負森林組合　管理地　（八尾町須農）

ウ　天候

□晴れ

エ　関係者

（ア）参加側

□旧富山市エリアの在住者等　（大人 11 名＋小人 6 名＝合計 17 名）

（イ）受入側

□NPO 法人　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊　（大人 8 名）

□婦負森林組合　（大人 6 名）

オ　交流メニュー

（ア）交流の分野

□ボランティア活動

（イ）交流の趣旨

□森の仕事について理解し、実際に体験し、自然に役立つ仕事をした充実感を持つこと。

□仲間とともに快い汗を流すこと。

カ　交流プログラム

（ア）交流のスケジュール

表４　当日スケジュール

時　刻	スケジュール
（19 日）	
8：00	JR 越中八尾駅集合
8：30	イタズラ村集合・受付
9：00	草刈り少年隊結団式、理事長挨拶、オリエンテーション
9：30	出発、車で移動
10：10	到着、森林組合より説明、草刈り開始（午前の部）
12：00	昼食
13：00	草刈り開始（午後の部）
15：00	撤収、車で移動
15：40	到着、草刈り少年隊閉会式
17：00	入浴（八尾ゆめの森「ゆうゆう館」）
19：00	夕食
20：00	森の仕事の話（講師：婦負森林組合長）
22：00	就寝
（20 日）	
6：00	起床 ・以降、通常のイタズラ村の遊び教室 （コマ・皿回し、薫製づくり、薪割り・焚火 等）
16：00	主催者挨拶、レポート提出の協力依頼
16：30	解散

（イ）交流の具体的な内容

□婦負森林組合のスタッフ等の指導を仰ぎながら、鎌を用いて植林地斜面の草刈りを実施した。具体的には、植林樹（ケヤキ、ブナ、ミズナラ等）の周辺の雑草を刈り取った。

□当日の天候具合や参加者の体調などを見て、実際に草刈りを行う時間を予定より短くするなど、フレキシブルな対応を心掛けた。

草刈り場所に至る山道

作業の説明（婦負森林組合青年部）

草刈りの実施状況

隋道内での昼食

八尾ゆめの森「ゆうゆう館」

森の仕事の話（婦負森林組合長）

キ　関係者の意見

（ア）参加側の感想・コメント

□草刈りや間伐の重要性を頭では理解していたが、今回実際の現場で身体を動かし、汗をかいて草刈りを体験することにより、その意義や作業の大変さを体感できて良かった。

（イ）受入側の感想・コメント

□イタズラ村と森林組合の双方が、普段から慣れている取組や作業を展開する方針で当日のプログラムを実施したため、それほど負担を感じないで済んだ。

□森林での作業や夕食後の講話を通じて、森林整備などに対する若い世代の意識を喚起していくことには、（長期的な取組として）とても大きな意義がある。

ク　問題点・課題

□今回は遊酔亭を宿泊場所と設定したが、参加者が当日草刈りを行った森の近くで夜を過ごせると、もう少し臨場感が湧いて良かったかもしれない。

□ボランティア参加者の体力や技術に限界があることもあり、「できることから、できる範囲で」というスタンスは必須である。

（3）大広田環境づくり協議会　エコタウンの見学等

ア　日時

□平成 18 年 10 月 15 日（日）9：30～15：30

イ　場所

（ア）エコタウンの見学

□富山市エコタウン　交流推進センター 等　（岩瀬天池町）

（イ）海岸でのゴミ拾い

□大村海岸　（海岸通）

（ウ）小学校での相互交流

□大広田小学校　（田畑）

ウ　天候

□晴れ

エ　関係者

（ア）参加側

□NPO 法人　富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊　（大人 21 名＋小人 23 名＝合計 44 名）

（イ）受入側

□大広田環境づくり協議会　（大人 10 名程度）

□大広田校区の父兄及び児童　（大人及び小人合わせて 300 名程度）

□富山市 環境部 環境政策課　（大人 5 名）

オ　交流メニュー

（ア）交流の分野

□体験学習（エコタウンの見学、小学校での相互交流 等）

□ボランティア活動（海岸でのゴミ拾い 等）

（イ）交流の趣旨

□山側の住民が、海側の住民の生活や取り巻く環境等を理解し、その実態を正しく認識すること。

□川下の海岸で川上からの漂着物（ゴミ）が散乱している状況について、目で見て確認すること。併せて、短時間ではあるものの、地元住民と協力して美化・清掃を行うことを通じて一体感を醸成するとともに、環境に役立つ仕事をした充実感を持つこと。

カ　交流プログラム

（ア）交流のスケジュール

表５　当日スケジュール

時　刻	スケジュール	備　考
9：45	・JR 富山駅北口（LRT 乗場）集合	・八尾地区の参加者が自動車で来る場合には、北口周辺で駐車 ・大広田地区より数名が合流 ① ・Ex 及び北陸農政局が合流
10：00	・LRT 富山駅北駅より LRT 乗車	・富山駅北駅　10：00　発 ・LRT 乗車料は各自負担（八尾側の意向）
10：25	・LRT 岩瀬浜駅着	・岩瀬浜駅　　10：24　着
10：25	・LRT 岩瀬浜駅 ⇒ エコタウン	・市がバスを手配 ・バスで移動、5 分程度
10：30 ｜ 11：30	・エコタウン着 ・エコタウンの紹介ビデオを観覧 ・常設展示場を説明	・大広田地区より数名が合流 ② ・市がエコタウンの概要を説明 ・市がエコタウンのパンフレットを配布
11：30 ｜ 11：45	・エコタウン産業団地を車窓見学	・エコタウン産業団地を車窓見学
11：45	・エコタウン ⇒ 大村海岸	・バスで移動、5 分程度
11：50 ｜ 12：50	・大村海岸着 ・芝生の所で昼食（弁当） ・漂着物（ゴミ）拾いを実施 ・古志の松原の見学 ・写真撮影	・大広田地区より 10 名程度が合流 ③ ・Ex が弁当を手配 ・大広田地区が椅子付きテーブル 40 名分を用意 ・市がエコタウン産のゴミ袋・軍手を用意 ・医療系廃棄物には手を触れないように呼び掛け ・雨天時はエコタウン交流推進センター内で昼食
12：50	・大村海岸 ⇒ 大広田小学校	・バスで移動、10 分程度
13：00 ｜ 14：50	・大広田小学校着 ・第 1 回大広田収穫祭（餅つき大会）の開催 ・イタズラ村によるミニ遊び教室（皿回し、コマ回し）の開催 ・時間があれば、新小学校を見学	・大広田地区の子供達が合流 ・餅つき大会に必要な備品（杵、臼）は大広田地区が用意 ・ミニ遊び教室に必要な備品（皿、コマ）は八尾地区が用意
14：50	・大広田小学校 ⇒ LRT 岩瀬浜駅	・バスで移動、10 分程度
15：00	・LRT 岩瀬浜駅着 ・その場で解散	・八尾地区の子供達が疲れているようであれば、JR 富山駅までバスがひっぱる

（イ）交流の具体的な内容

□海岸でのゴミ拾いに先立ち、事務局サイドで軍手を用意したり、医療系の廃棄物には絶対に手を触れないように呼び掛けたりするなど、安全面には細心の注意を払った。

□八尾地区の子どもの疲労等を見てバスの移動経路を変更するなど、フレキシブルな対応を心掛けた

□身近な環境問題の観点に即し、役立ち度合い重視のメニュー（エコタウンの見学、海岸でのゴミ拾い）と楽しみ度合い重視のメニュー（小学校での相互交流（コマ回し、皿回し、餅つき 等））をバランスよく配置して飽きが来ないよう工夫した。

□単に、エコタウンの施設を目で見たり関連する説明を耳で聴いたりするだけではなく、二酸化炭素排出削減効果に優れるＬＲＴへの乗車や昼食時に出る弁当ゴミの分別、及び、海岸でのゴミ拾いなどプログラムの中に自分の身体を用いて環境意識の高い行動を実際に体験できる仕組みを設けるよう工夫した。

LRT 乗車（富山駅）

常設展示場見学（エコタウン）

昼食（大村海岸）

弁当ゴミの分別（大村海岸）

ゴミ拾いの実施（大村海岸）

ゴミ拾いの実施（大村海岸）

最寄のステーションへ搬出（大村海岸）

ゴミ拾い後の集合写真（大村海岸）

ミニ遊び教室（大広田小学校）

皿回し体験（大広田小学校）

餅つき体験（大広田小学校）

餅つき後の試食（大広田小学校）

キ　関係者の意見

（ア）参加側の感想・コメント

□単に施設を見るだけの取組ではなく、海岸で昼食の弁当を食べたり、その海岸で清掃活動に従事する等、ある程度アクティビティを取り入れたことが良かったと思う。

□子どもには本来、身体を動かしたがる特徴がある。したがって、継続的に子どもを活動に参加させていくためには、実際に身体を動かす活動を組み込むよう配慮した方がよいと思う。

（イ）受入側の感想・コメント

□山側の住民である八尾地区の方々に、大村海岸を清掃してもらえたことについて、非常に感謝している。

□清掃だけのイベントとするのではなく、環境学習（エコタウンの見学）や遊びの要素（大広田小学校での各種イベント）と組み合わせて交流を実施したことが、和やかな雰囲気を醸し出し、良かったと思う。

ク　問題点・課題

□参加受入の人数や予算等に限度があることから、「できることから、できる範囲で」というスタンスは必須である。

□今回の交流を契機として、次年度以降も両地区の交流を自律的な取組へと高めていくことが大きな課題である。

（4）黒瀬谷交流センター運営委員会　喜楽里そば美食会

ア　日時

□平成 19 年 1 月 28 日（日）10：00～14：00

イ　場所

□黒瀬谷交流センター　喜楽里館　（八尾町小長谷）

ウ　天候

□晴れ

エ　関係者

（ア）参加側

□旧八尾町エリアの在住者　（人数は計上せず）

□旧富山市エリアの在住者　（人数は計上せず）　等

（イ）受入側

□黒瀬谷交流センター運営委員会　（大人 30 名程度）

オ　交流メニュー

（ア）交流の分野

□体験学習（地元農産物の試食 等）

（イ）交流の趣旨

□海側の住民が、山側の住民の生活や取り巻く環境等を理解し、その実態を正しく認識すること。

□当日の会場とＪＲ最寄駅の間に公営のシャトルバスを走らせることで、参加者の便宜を図るとともに、シャトルバスの燃料にＢＤＦを用いていることをＰＲすることにより、市民の環境意識を高めること。

カ　交流プログラム

（ア）交流のスケジュール

表６　当日スケジュール

時　刻	スケジュール
10：00	イベント（美食会）開始
｜	・参加者は随時自由に参加、そば等を試食。 ・参加者の一部は、BDF 燃料のシャトルバスを交通手段として活用。
14：00	イベント（美食会）終了

（イ）交流の具体的な内容

□八尾産のそば粉 100%使用のそば等の地元農産物を素材とする料理を会場で振る舞い、参加者はその場で試食。

□そば以外にも、地元の食材を用いた料理を豊富に用意し、バリエーションに配慮。

□また、参加者の移動の足についても配慮し、市が協力してＪＲ最寄駅（越中八尾駅）と喜楽里館の間でシャトルバスを運行。運行に際しては、ＪＲ高山本線との接続などフレキシブルな時間調整を実施。

□なお、公共交通利用による二酸化炭素排出削減を推進する意味も込めて、ＢＤＦバスに乗車した先着 20 名に対して、地元農産物の野菜を進呈。

当日の会場（喜楽里館）

シャトルバス（燃料は BDF）

そばの調理

そばの試食

キ　関係者の意見

（ア）参加側の感想・コメント

□地元産の食材が新鮮であり、そば打ちのレベルもとても手慣れていて高く、非常においしく感じられた。

（イ）受入側の感想・コメント

□「喜楽里そば美食会」は、毎年継続的に実施している定期的なイベントであるが、そこへの参加者として、例えば、大広田地区からの人数が予測を持って見込めるようになると、取組が安定するので非常にありがたい。

ク　問題点・課題

□参加受入の人数や予算等に限度があることから、「できることから、できる範囲で」というスタンスは必須である。

□今回の交流は特段、大広田地区のみを対象にしたものではなかったが、当地区に対しては事前に電子メールなどを用いて、積極的にＰＲした。ただし、その効果は限定的であったものと推測され、今後、交流を促進するための有効な呼び掛け手法なども検討すべき要素の一つであると考えられる。

第４章　取組の成果及び問題点・課題の整理

１．取組の成果

（１）成果把握に係る考え方

富山市では、都市農村交流の基本的なスタンスとして、本社会実験を契機として今後、小規模でもよいから同様の取組を長期継続的に安定した交流へと育成していくことが重要であると捉えている。つまり、本社会実験はあくまでもその一里塚であり、今回の経験などを通じて、必要な認識やノウハウを蓄積していくことが何よりも肝要であると考えている。

また、交流実施団体から出た意見として、「交流のやり方としては、何よりもトップダウンではなくボトムアップで行うこと、行政主導ではなく地域組織や地元中小企業などの民主導で行うことが肝要。行政主導では、どうしても“やらされ感”が募り、取組が長続きしない」との声が聞かれたため、こうした点にも配慮する必要があることを念頭に置き、本事業に臨むよう心掛けた。

したがって、本社会実験の成果把握の方針としては、“参加者の満足度”を最重要視することとした。その理由は、取組実施回数や参加者人数などの表面的な数値指標より、具体的な取組を仕掛けた受入側のキーパーソンや、参加した個人がどれだけ満足したかという意識レベルの実態把握、若しくは、「こうした方がもっと良くなるのではないか」という次なるステップへの課題抽出の方が、このような交流の長期性・継続性・安定性を強化するためには重要であると評価したためである。

言わば、“小粒ではあってもキラリと光る取組”は存在するはずで、そうした取組の方が将来的な発展性が見込めるとの問題意識に基づく方法論を採用した訳であり、以下では、そのような方向性に即して整理を試みた。

（２）把握された取組の成果

ア　定量的な事項

前述した通り、必ずしも定量的な事項を一義的に重要な評価尺度と捉えている訳ではないが、取組の成果を判断する際の一つの目安にはなるものと考え、参考情報として、参加人数及び参加者が抱いた印象や感想を定量的に把握した。

○農村側の参加人数：約100 名
○都市側の参加人数：約350 名
※計４回の実施イベントへの参加人数の合計である。
○同様の取組が、今後も継続された場合、再度参加したいかどうかを尋ねたところ、ほぼ全員が（準備作業等が過負荷にならないことを条件に）参加の意向を表明。

当然のことながら、「参加人数何名であれば成功」というような評価が、一概に成立する訳ではないので、これらの数値のみを用いて一律な評価を下すことは困難である。

イ　定性的な事項

今回の社会実験では、農村側の特定の組織と都市側の特定の組織という形態で、当初より交流の主体を明確に定めたことが功を奏し、上記体制等の整備構築に向けた関係者の意識の変化や、地域内の活性化の効果について、実際の参加者から下記のような声を聴くことができた。

○都市側の生活環境等の状況を一定なりとも理解できた。
○農村側の生活環境等の状況を一定なりとも理解できた。
○自分たちの得意分野を拠り所として「できることから、できる範囲で」協力していけばよいことが分かり、それほど作業負担を感じることなく、効率的に交流を実施できた。
○本社会実験を契機として開催されたイベントを、自らの地区の年間事業の一つとして位置づけることができた。
○次年度以降の開催イベントの有力候補として、具体的な検討の素材が得られた。この素材を吟味して、次年度以降の新たな展開へとつなげていきたい。

また、社会実験を進めるにつれて、関連主体より都市農村交流に係る具体的な提案が見られるようになったことも一つの効果である（例えば、4回目の「喜楽里そば美食会」は、当初は本社会実験の枠組みの中では実施されない予定であったが、農村サイドより積極的な情報発信が図られ、実施に至ったモデル的なケースである）。

本社会実験が契機となり、今後は各地区で、長期的・継続的・安定的に同様の取組が展開され、地域内の自然環境やコミュニティ活動が十分に保全・維持されていく体制や状況を農村側・都市側が連携して、整備構築していくことが望まれるところである。

２．問題点・課題の整理

本社会実験を遂行した結果、明らかになった問題点・課題を整理すると下記の通り、大きく「交流主体」、「調整機関」、「費用負担」という三つの観点に集約できる。

（１）交流主体に関して

ア　問題点

◆自らの地区として既に手持ちの交流メニューを活かしながら都市側農村側との交流を進めていくことは可能だが、それだけのために、一から体制を整備して、メニューやプログラムを練り上げ、新たな取組として地域に根づかせる場合には、多大な負担と労力が必要になる。

◆したがって、実際に交流を進める場合には、参加・受入の両面にわたり、下記のようにきちんと機能できる地元組織であることが望まれるが、このような組織が地域内に存在するとは限らない面がある。

・農村側あるいは都市側の活動に対して、興味や関心を十分に持つとともに共感できるだけの好奇心があること。

・農村側あるいは都市側の活動メンバーを、遺漏なく受け入れるだけの容量や能力を有すること。

・対外的のみならず対内的にも、仲間のメンバーを上手にまとめられる力量を有する人材に恵まれていること。

イ　課題

◇上記のようなポテンシャルを有する地元組織を見出すこと。

◇そのような地元組織が現状存在しない場合には、創り出すところから始めること。

◇その上で、既存の状況（地域のポテンシャル）と都市側あるいは農村側との交流との理想像の間で、対応能力を見極めながら、バランスを上手に取っていくこと。

◇そのようなバランスを踏まえて、現実的なアクションの優先順位を適切につけていくこと。

◇参加者として子供を巻き込むと、交流による効用の面からも、その保護者の参加も見込めるという点からも好ましいこと。

◇最近はコミニティ行事等も多く、それら町内会などの所属組織自体の行事を交流事業とするよう誘導すること。

（２）調整機関に関して

ア　問題点

◆本社会実験では、組織間調整に割ける時間、労力、人員等に制限があったため、主な調整作業を地域外の団体に委ねた。一方、実際に調整作業を進めるにつれて、「神は細部に宿る」ような面があることがわかり、下記のようなきめこまやかな折衝や対応が必須となる面があることが判明した。

・移動手段をどうするか（自家用車を出すのか、公共バスなど行政の支援を

仰ぐのか 等）

・昼食をどうするか（誰が弁当を手配するのか、誰が費用を負担するのか、自ら弁当を持参するのか 等）

・川遊びなど危険を伴うアクティビティがあるので、保険へ加入することが望ましいのだが、そのことを誰が言い出し、誰が手続きを行い、誰が費用を負担するのか・・・・・

・相手方に恥はかかせられないので、それなりに参加人数を揃えたいのだが、誰がそこの調整をつけるのか、また、実際に誰が参加するのか・・・・・

◆このような細かい事項を個別に確実につぶしていかないと、関係者の間にしこりが残り、取組が長続きしないことが危惧される面がある。

◆農村側と都市側と関係の深い公共セクター（例えば、農村側であれば農林水産部、都市側であれば環境部など）が異なるため、関連情報が一気通貫で流れづらい面がある。

イ　課題

◇地元組織をきちんとコーディネートできる能力、言い換えれば、対応・調整能力を有する組織を見出すこと（当然、調整機関も地元組織である方が望ましい）。

◇今回実施したような交流を長期安定的に継続していくために、必要な調整機能を内部化すること。

◇上記のようなきめこまやかな調整等が望まれている状況を正しく認識した上で、タイミングを逃さず、フレキシブルな対応を図ること。

◇例えば、本調査事業の遂行チームとして、市の農林水産部と環境部が連携した形態を参考に、必要に応じて交流を推進するための行政機関内での円滑な情報伝達体系を確立すること。

（3）費用負担に関して

ア　問題点

◆本社会実験では、そのための予算が計上されたので、費用の心配をすることなく、遅滞なく交流イベントを実施できたが、通常は必要な原資を行政サイドで 100％負担することは困難な状況にある。

イ　課題

◇どのような取組を実施する場合でも、ある程度の費用がかかることが想定されるので、その費用を誰がどのような方法で負担するのかが課題である。

◇また、交流地区の自立的な活動の高まりを支援するべく市の既存事業を活用することも検討に値する。

◇併せて、長期的な観点より、調整機関である事務局の運営や既存事業の継続展開について、その経費的な支援を国などへ要望していく姿勢も求められる。

第５章　今後の取組に向けて

次年度以降の取組は、本年度の経験やノウハウを踏まえて当該地区へ委任することが基本線であり、行政はその側面支援に回る予定である。つまり、行政としての関係性を継続的に保ちながらも、地域主導の取組や活動へと育成していくことを狙いとしている。

したがって、現時点では、具体的な共生・対流システムの導入手法や、取組の具体的な方向性に係る判断は、基本的には当該地区で交流を図るプレーヤーの属性や考え方により、規定される要素が大きいものと想定される。

しかしながら、本社会実験の検討過程を通じて分かったことだが、今後も同様の都市農村交流を進めていくためには、基本的な考え方として留意すべき二点を指摘できる。

一点目は、地区ごとに交流を行う前の段階で、その交流のコンセプトを明確に決め、関係者の意識共有を徹底しておくことである。本社会実験では「神通川でつながる地域性に配慮して、主に環境の分野で両地区に貢献できる活動を行う」というコンセプトを明示した上で交流を実施した。そうでないと、交流にはどうしても作業的な負荷が発生するため、「何故このような手間暇のかかることをしなければならないのか」といった疑問や不満が溜まり、取組が停滞してしまうことが懸念されたためである。

二点目は、あくまでも段階的に交流のレベル（イベント開催頻度や内容の熟度等）を引き上げていくことである。本社会実験では「できることから、できる範囲で」という説明を関係者に対して繰り返し行って、試行錯誤を重ねながら徐々に望ましい交流へとつなげていく方針であることを周知徹底した。そうでないと、始めの一歩を踏み出せず、イベントなどの取組が単発で終わってしまうことが懸念されたためである。

ただし、これら二点の考え方に十分に配慮したとしても、前章で整理した通り、都市農村交流などの地域間交流を進めていく場合には、当事者となる組織の力量もさることながら、それらの組織どうしの調整を図り、関係をつなげていく役割を果たす調整機関の力量も、取組の成否に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

具体的には、今後の取組の方向性として、本社会実験の根底の長期的なコンセプトである『出会い・交流の場』を創設し、該当する土地を協働管理していくこと、さらには、本社会実験で対象とした地区以外への水平展開が求められるが、その際、調整機関の役割としては、個別のマッチングに加えて、地区ごとのニーズとシーズを自立的に結びつけることを可能にする体制や機能を整備する必要がある。その際、本市において非常に発達している地縁団体の上部組織を活用できると、効率的な情報提供が可能になるが、そうした組織は行政との関係が深いという特性を有する場合が多い。

したがって、これら組織間調整の主要部分をＮＰＯなどの地域内の主体が担うとしても、行政の参画は不可欠であり、地域組織だけでは不足する部分を行政が支援する体制を構築していくことについても、今後、検討を進めていく余地がある。

以上を踏まえ、**既存の団体や活動をうまく活用しながら、長期的な視野から民主導の調整機関がうまく取組の優先順位をつけて、必要かつ十分な意見調整を図るという“富山型都市農村交流モデル”**の**アウトライン**を整理すると、**図７**の通りとなる。

併せて、当該モデルの**模式図**及び段階ごとの**調整機関の位置づけ**を**図８**及び**図９**に、それぞれ示す。

基本的な考え方

◎ 交流ごとに、そのコンセプト（農業、環境、教育・・・・）を明確に決める

◎ 交流ごとに、そのレベルを段階的に引き上げていく

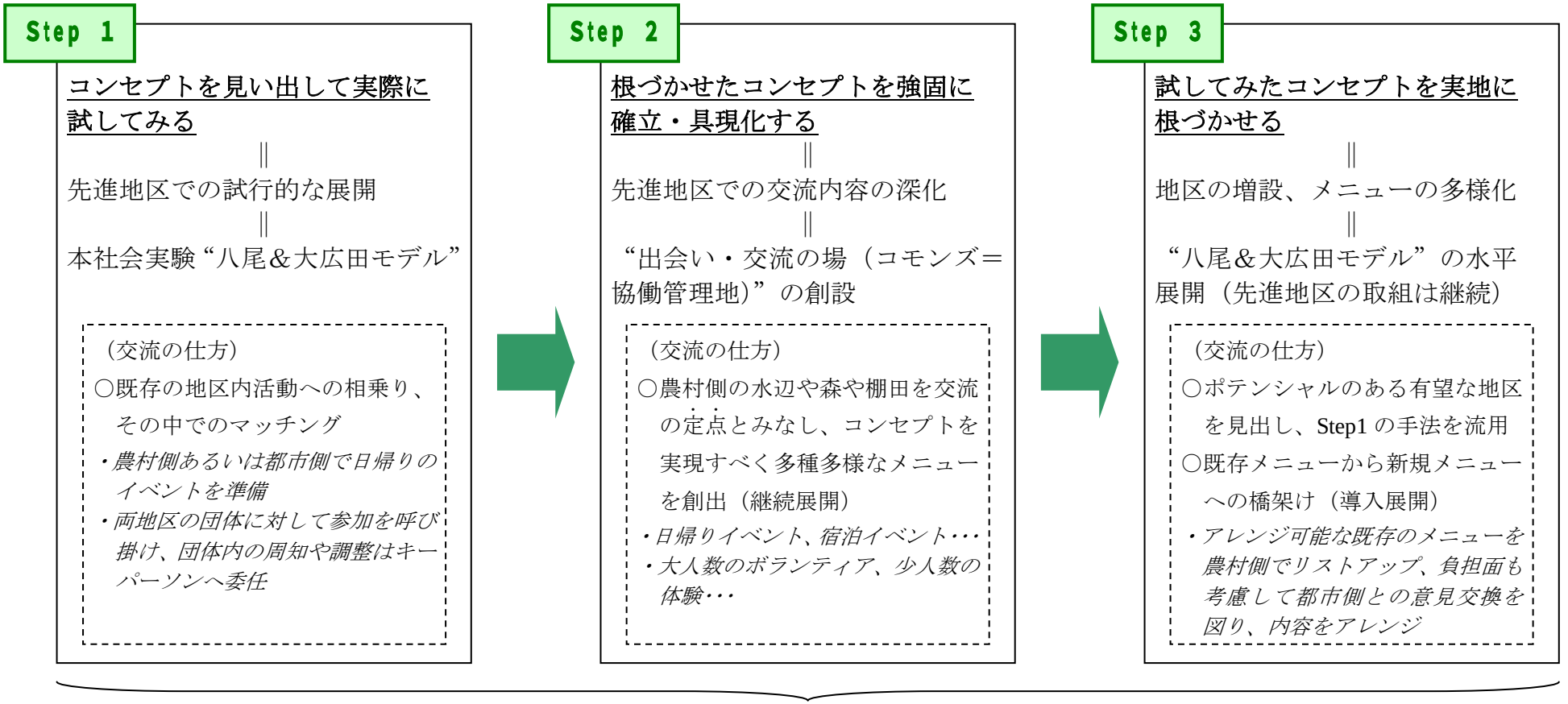


図７　富山型都市農村交流モデルのアウトライン

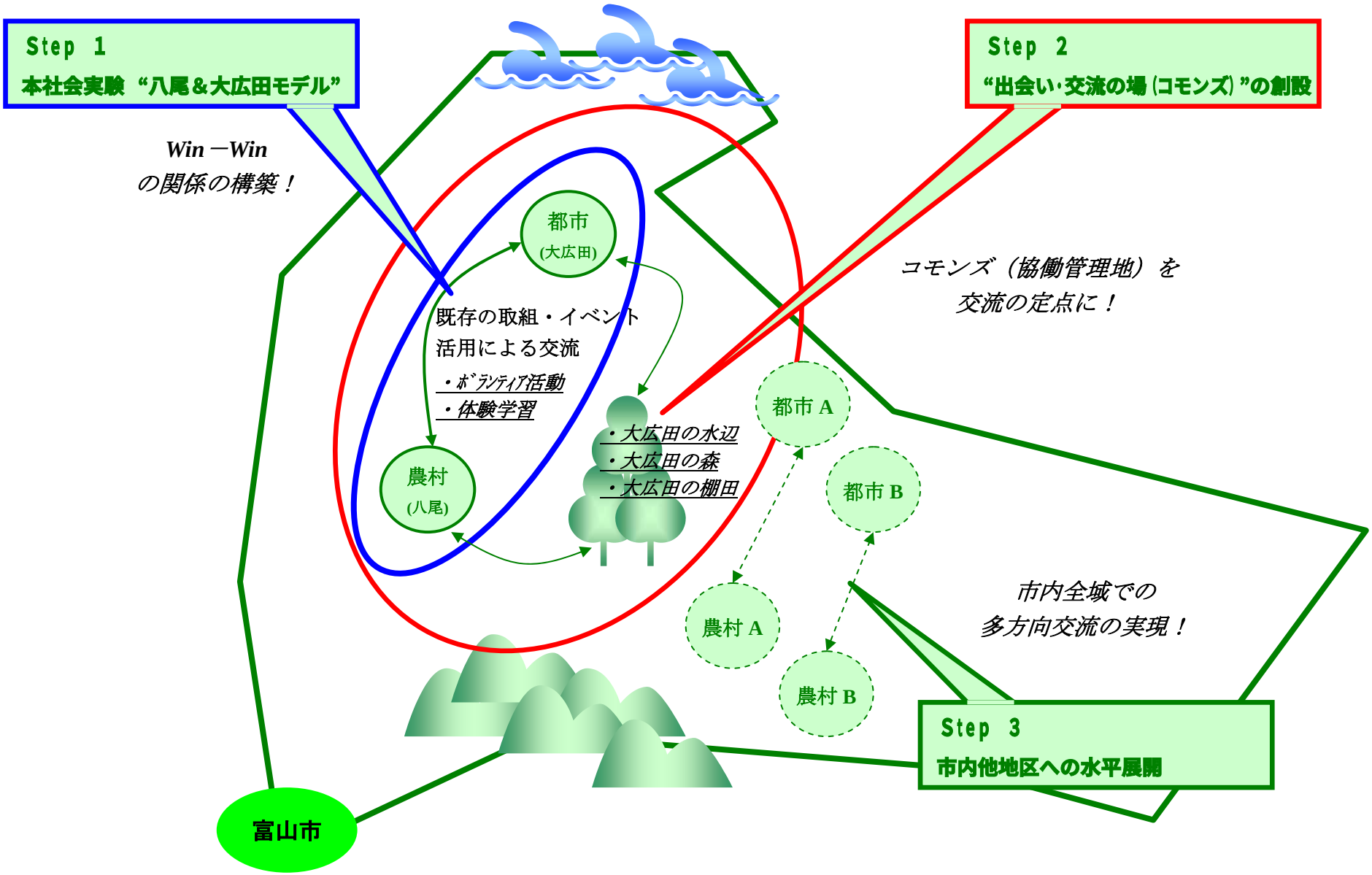


図８　富山型都市農村交流モデルの模式図

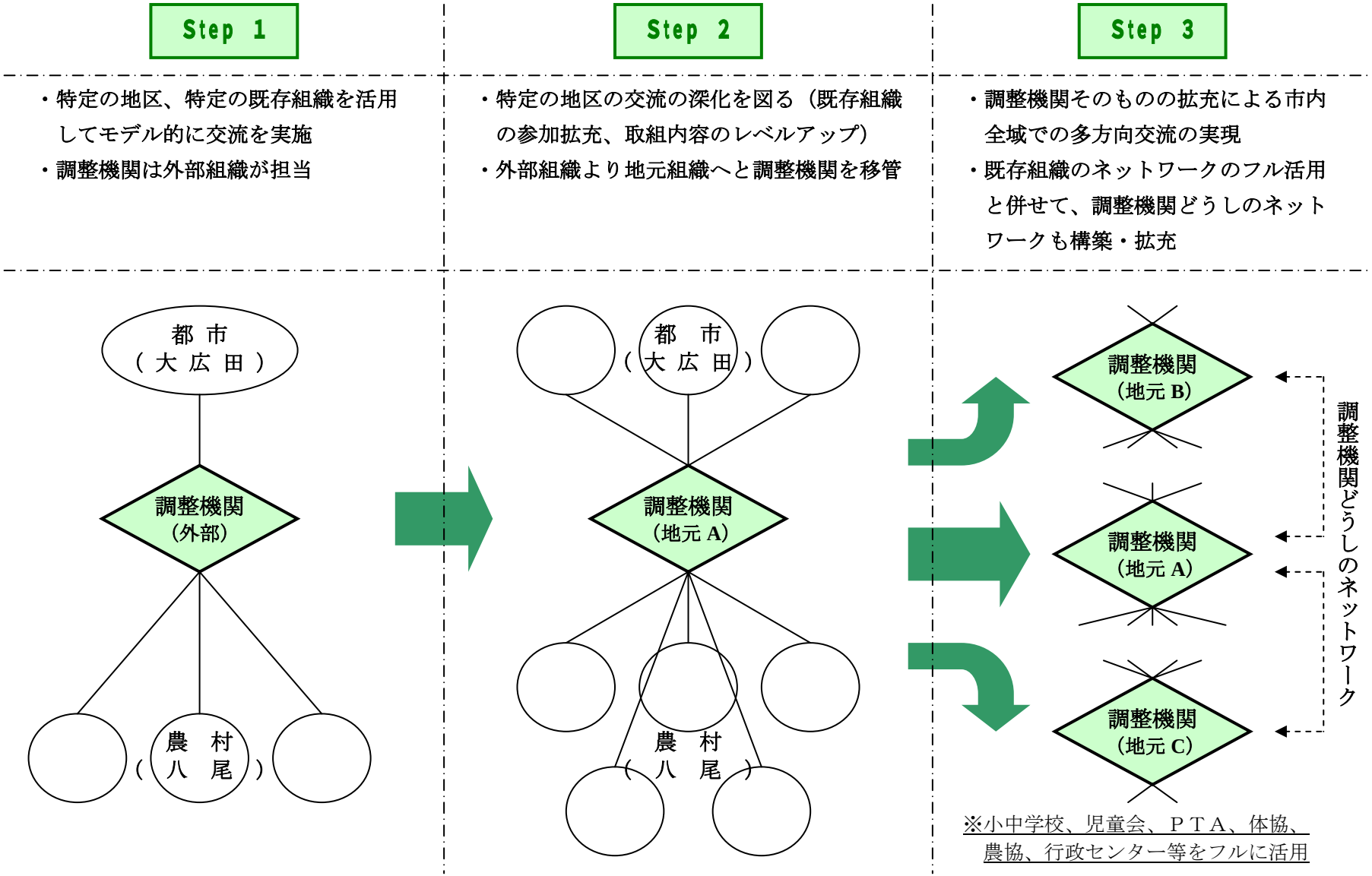


図９　富山型都市農村交流モデルにおける調整機関の位置づけ